北陸中日新聞　2014年(平成26年)7月13日(日曜日)

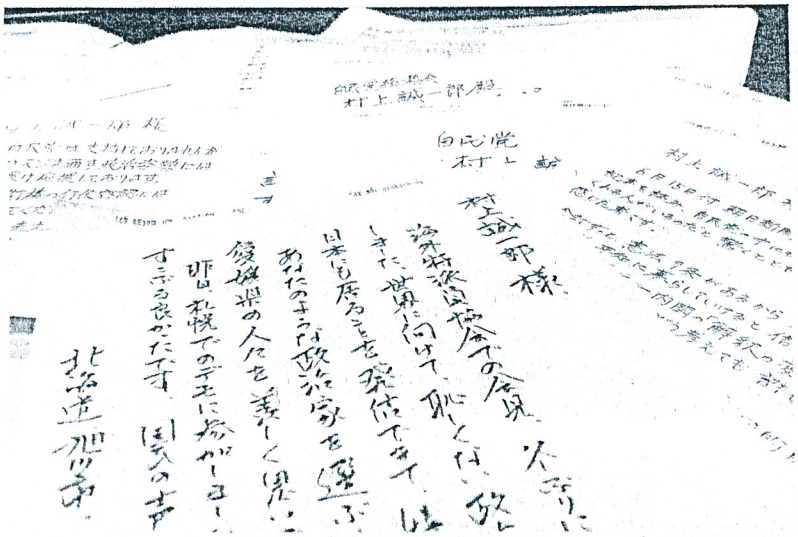
解釈改憲「反対」自民・村上氏

国民をなめるな

集団的自衛権の行使を認める閣議決定を行った安倍政権の解釈改憲に、自民党内から明確に反対している村上誠一郎衆院議員。本紙のインタビューにも「こじつけの議論で法治国家とは言えない」と批判。相次ぐ激励に、「国民をなめると大変」と危機感を吐露した。（清水俊介）

＝1面参照

「全部こじつけ」「選挙で負ける」



上「国民をなめていると自民党は大変なことになる」と危機感を吐露する村上誠一郎衆院議員　下村上議員の事務所に届いた激励のファクス＝いずれも東京都千代田区永田町で

―解釈改憲が閣議決定された。この間の党内をどうみるか。

「思考停止。最初から憲法九条の空文化ありき。集団的自衛権を行使するために、全部こじつけでやっていた。一般の国民には通用しない論理だ。内閣が代わるたびにこんなことをやって法律を変えていたら、法治国家じゃない。憲法の平和主義がこの手法で崩されれば、国民主権や基本的人権の尊重も崩れる。その危機感が、自民党にはビンときていないようだ」

―党内で反対が広がらなかった。

「党役員人事と内閣改造が終わらないと。今、入閣待望組が五十、六十人いるが、入閣できるのはせいぜい三、四人。そこでみんな目が覚める。私が（反対で）突っ張れるのは、安倍首相の下でポストをもらう気がないから」

―一方で、全国的に応援の声が広がっている。

「国民の多くは私と同じ考え方なのに、永田町に来た途端に減り、自民党本部に来ると私一人。それこそが問題。国民の考えに同調できないと、次の選挙でしっぺ返しを受ける」

―自民党は勝てない？

「負ける。今でもたった四割の得票で七割近い議席を取っているわけだから。国民はばかじゃない。国会議員よりよほどわかっている。国民の声を知らないのは自民党だけだ」

―世論は解釈改憲に反対の方が多い。

「安全保障環境の変化だの、中国脅威論だの、日本が米国に見捨てられるだの、安倍政権は情緒的な理由を言っているだけ。そんなことを言っても国民はついてこない。国民のほうが問題の所在をわかっている。国民をなめていると大変なことになる。『もう一回自民党に政権を任せよう』とはならない」

―激励のメール、ファクスを見てどう思うか。

「恐ろしさを感じる。こんな反響は議員になって初めて。淡々と自分の主張、正論を言っているだけなのに、こういう反応が返ってくるということは、逆に言えば、国民が反自民で動いているということだ。今回よく分かったのは、あきらめずに言い続けることの大切さ。お寺にある大きな釣り鐘は指で一回押しても動かない。でも、百回、二百回、三百回と押していると、大きな釣り鐘が動きだす。そんな感じがする」